

書評

No. 59
1982. 1

書評●書をもて、ともに語れ—1981・性教育書・回顧—／小代誠一郎
『文学の記号学』（ロラン・バルト著）の快樂／後藤尚人 他
連載●日本中国 ことばの来往 その8／芝田 稔 他



書評編集委員会

書評/59号 1982/1

羅針盤	1
書評 書をもて、ともに語れ—1981・性教育書・回顧— 小代誠一郎	4
『文字の記号学』(ロラン・バルト著)の快樂 後藤尚人	14
映評 『典子は、今』を撃つ! 関大I部障害者解放研究会	24
連載 日本中国 ことばの来往 その8 芝田 稔	33
北京で生活して (七) 鳥井克之	40
お知らせ	47
編集後記	48

'82.1 羅 針 盤



一九八二年を迎えた。ポーランドの情勢は緊迫化しており、この59号が発行される時には、更に情勢は進展しているかも知れない。しかし、私達は日本という遠隔地において、本当にポーランドという国において起きている事態について、その真実を知っているのだろうか？

真実とは客観的判断のできる情報がなくてはならないし、その前提には、情報を判断するための基礎的な認識がなくてはならない。しかし、ポーランドという国については、私達は日本の教育過程の中では、東欧諸国という一群の一つとしてしかとりあげられていない。

ポーランドという国家の形成過程、歴史、文化、風土についても、実は全く無知に等しいのが実情である。いわば、ポーランドという国に対する知識としての認識は一切ないといっても過言ではない。このような日本の中に、マスコミから一方的に情報が流されている。確かに起きている客観的事実は事実としてあるだろう。しかしながら、いかなる客観的事実も、それを伝達する側の視点（主観）を抜きにしてはありえない。このことを考えると、連日報道されているポーランド情勢は、どのように理解すべきか、否、理解しようがないのが事実である。言葉を変えれば、基礎知識がなければ、当然、その情報を客観的に判断すること等はできない。つまり、信ずる

以外にないということである。そうでなければ、全てを否定することであろう。

このような現実があるにも拘らず、世界で何かが起こる度に、したり顔をした評論家がかこかしこから現われて、もつともらしく分析してみせるが、そのおよぼす影響がどれだけのものであるのか、ということに対する認識があるのであろうか。全く疑問といわざるをえない。

その意味では、日本の評論家の無責任さは、犯罪的であると言える。さらに、恐ろしいことは、これらの評論家たちが商業マスコミを通して、繰り返し情報を流すことにより、その情報が真実であるか否かとは関係なしに真実とされることである。

日本の教育が西ヨーロッパとアメリカを中心として志向するものであり、付け足しとして、中国、ソ連が加わり、残りの地域は全て一群として片付けられていることは事実であり、明らかに間違った教育の在り方だと言えるだろう。

しかし、一番恐ろしいことは、ポーランド情勢の報道の在り方と同様のもので、私達には真実の情報が知らされていないということである。裏返せば情報（マスコミ等）が完全にコントロールされているということである。

例えば食糧予測の問題がそうである。ポーランドの問





題の基本的な源は、実は食糧問題であることは自明のことである。にも拘らず誰もそのことを追求しようとしていない。確かに一般的には語られている。しかし、一步踏み込んで世界の食糧の予測をした場合、これはとんでもない問題が浮かびあがってこざるを得ないのだ。

本年度は中国、ソ連も穀物生産は予測を大幅に割ってしか生産されていない。穀物が生産されなければ、当然家畜の生産もそれ以上に減らざるを得ない。この繰り返しにより、従来ソ連経由で賄われていた穀物と肉がその結果入らなくなったのである。それに加えて、アフガン問題等により、米国とカナダ等の小麦がソ連に入らなくなったことが、よりポーランドへのしわ寄せを大きくしたのである。

しかし、これはポーランド一国の問題だけではない。アメリカ大統領の諮問機関がまとめた、二〇〇一年の地球に予測分析されているように、世界の人口を養う食糧は、十年後で不可能となることは計算上明らかであるからである。しかも、氣象学的に分析しても、中国、ソ連だけではなく世界的に冷害が増大することも、この五、六年間の世界的に発生している冷害分布分析により明らかとなっている。日本にも実は古米、古古米はすでにないという事実を私達は知るべきではないか。

(F)

書をもて、ともに語れ

— 一九八一年・性教育書・回顧 —

小代 誠 一 郎

日本性教育協会が総理府青少年対策本部の委託をうけて実施した「青少年の性行動」調査によれば、性行動の経験率については男女とも明らかに増加傾向が認められ、特に女子の増加が著しいようだ。このような調査それ自体がもつ意味の検討はぜひ必要と思われるが、ここでは、その性行動がもし豊かな人間関係の基盤にたっており、更にその人間関係を豊かにしていく契機となるならば、問題は重大でも深刻でもないということをおきたい。なぜなら、性行為だけがあって人間関係がない性行動というものがこの世界には存在しており、その意味で疎外された性行動がこの疎外された人間の世界に存在して

おり、そのような疎外された性行動の問題こそ現代の性をめぐる問題のひとつであり、問題解決のひとつの鍵は人間の性行動がどれほど豊かな人間関係に暖かく包まれたものになっているか、そして人間の出会いをどれだけ豊かなものにするかというところにあるからである。

豊かな人間関係に暖かく包まれ、また、豊かな人間関係を形成していく性、あるいは人格と人格のふれあいとしての性——これこそ人間の間的な性であり、このような内実を持つ性は人間の権利ともいえるのである。

さて、このレポートの目的は一九八一年に刊行された性教育書を振り返り、それぞれの特徴と問題点を指摘す

ることにある。

* * *

教育誌本シリーズの一冊である『たのしい性教育』（河出書房新社）はこれまでに発表された性および性教育についての様々なエッセイを集録している。中山千夏から倉橋由美子、大島渚や山本晋也（！）にまでわたる多彩な論者は壯観である。

さて、ここでは今は既に故人となった二人の大先輩の主張から紹介していこう。まず石垣純二は「性教育は寝た子を起こすか」という古くて新しいテーマを掲げて日本の現状を斬っている。「寝た子を起こすな、人間はひとりでセックスに目覚めていくのだから、性教育なんか余計なことだ」と考えるのは間違いだである。「まず第一に、人間は自然に成熟していき、自然にセックスに目覚めるものだ」というのは間違いである。「いま、セックスはあらゆるジャーナリズムに氾濫していて子どもたちを決して自然のままに放っておかない」。こんな時代に「自然放任などというのは教育の自殺でしかない」。だからこそ教師が全人教育としての性教育をするべきだ、と石垣は述べている。村松博雄はこれも今は亡き朝山新一とやらんで戦後の性教育運動に大きな役割を果たしたが、彼の「性教育とはなにか」という好エッセイがここに収められ

ている。村松は明言する。「なんといつても性の正しい科学的知識を与えなければならぬ。……」。若い人には正しい性の知識が必要です。おぎなりの説教や、一方的な純潔教育だけではすまされなくなっています」。このように彼らが述べたのが七三年と七〇年である。しかし、情況はどれだけ変わったのか。まさしく牛歩とよべるような進展の仕方に間宮武が「わが国の性教育はなぜ定着しないのか」といういらだちを隠せぬようなテーマで文章を書いている。ただし、内容は定着しない原因の解明にあてられているのではないが、間宮はそのなかで戦前・戦後の性教育の歴史を見事にまとめた上で次のような課題を指摘している。第一に学校における積極化。第二に教育行政における積極化。第三に教員養成における性教育の履習と研修の制度化。その隣に『現代性教育研究』の編集長である富田光一の「海外諸国の性教育の現状」という報告が載っている。富田は性教育について「セックスは下半身の行動に限定した意味で使われるのに対し、セクシュアリティとは、個人の全人格的存在をあらわす概念である。性教育とは、セックスの教育ではなく、セクシュアリティに関する教育なのである。」と述べている。そして、各国の現状を紹介したあとで、各国に共通の課題として次の三点を挙げている。(1) 幼児期からの性教育、

(2) 性教育指導者の養成と再教育、(3) あらゆる差別の点検。

以上の四人の主張を私なりにまとめてみると、性教育をめぐる問題点がかなり明らかになる。すなわち、(1) 現代においてこそ性教育が必要とされていること、(2) 性教育とはセクシュアリティの教育であり、その目的はまず正しい性の知識を獲得することであり、その基底にはあらゆる差別を許さないという思想がなければならないこと、(3) 性教育をすすめるためには学校および教育行政が積極化する必要があること、(4) その必須条件として性教育指導者の養成と再教育を行なう必要があること、(5) 性に対する基本的態度は四歳までに決定するから幼児期からの性教育が望まれること、従って親も性教育に関わること(—というより、日常生活のなかで無意識のうちに性教育をしていることを自覚すること)。

このように述べてくるとカタ苦シク感じられていけないが、たとえば永六輔のエッセイを読むとこの緊張感はどこかへいつてしまう。こんな調子である。「丸顔の母から面長の娘が生まれた。面長の娘は面長の父親をじっとみつめて、ある日いった。「私はママから生まれたんだよね。パパは関係ないよね？」突然のことに僕は絶句」して困り続けたという話。また、「健全なる魂はあけすけで助平な家庭にやどる」という平野威馬雄は三人の子供に

フランス小咄をしたそうだ。「いいか……赤ん坊が二人、よもやま話をした末、『ママのおっぱい、いちばんおいしいね』『おいしくないよ……』『なぜ?』『だって、たばこのにおいがするんだもの』『どうだ?……おもしろいか?』、子供(高一の男子、中三・小六の女子)は間髪を入れずにわかつたらしくて、わが家の性教育はまずまずと安心したという話。もつとも、今ではたばこを吸う女性もふえているので、この小咄も使えないかもしれない。

ほかに、女子中・高生がカバンをあげればザーマンがベッタリ入っているというシヨッキングな話を紹介しつつ、「性の痴呆化現象」を批判する池上千寿子の文章、思春期におけるからだの変化についての田多井吉之介の解説などが収められている。読み進めていくうちに性教育についてどう考えればいいのか明らかになっていくように構成されていて、この『たのしい性教育』はコンパクトにまとめられた性教育への案内書になっている。

* * *

松岡弘著『これからの性教育』(有斐閣)は大阪教育大で学校保健・保健科教育法を担当している著者が「教育の場で性教育をどうとりあげ、実践していけばよいか」について考えをまとめた書である。調査結果や図・表を有効に使いながら性教育のポイントを的確にまとめている。

次号60号 新入生歓迎特集号 への投稿を募ります



- 新書版ながら、実用性という点でこの書もまた性教育の入門書の役割を果し得るだろう。具体的に著者が提示している小学校における性教育の内容は次のようなものである。
- (1) 身体の発育・発達に関する事項
 - ① 男女の身体の構造と機能、② 身体の発育とその男女差・個人差、③ 生命の誕生と親子の結びつき、④ 月経の意味とその手当て、⑤ 変声、発毛、精通、夢精など。
 - (2) 基本的生活習慣に関する事項
 - ① 身体の清潔、トイレの使い方、用便の方法、入浴

- の仕方など、② 衣服や身の回りの清潔、③ 小学生としての好ましい服装。
- (3) 学校生活、家庭生活、社会生活に関する事項
 - ① 男女の特性と役割、② 男女の相互理解と協力、③ 男女の交友と交際、④ 痴漢、誘拐などの性被害の防止。
- 更に、中学・高校においては小学校での学習の上にて性交や妊娠について指導するとしている。ただし、避妊については「中学生には家族計画の意味を理解させるに留め、その具体的方法についてはふれる必要はない」が、高校生、特に女子生徒に対しては「家族計画・避妊

テーマ●新入生にこの書を推薦する

形式●新入生に対する推薦書をあげ、紹介して下さい。

枚数●25字×22行を一枚として、十枚前後(詳しくはお知らせに書いてあります)。

お知らせに書いてあります)。

締切り●二月二十八日

送り先●〒565 吹田市千里山東三・一〇・一

関西大学生協同組合

書評編集委員会

☎(〇六)三八八・一一二一(内線 四八二二)

の方法を指導しておく必要性は高くなる」としている。私も著者の指摘は妥当であると考える。が、教師が生徒から個別的に性交や避妊についての相談を受けた場合は、なぜその子がそのような疑問や悩みを持ち相談に来たかという点に配慮しながら慎重に対応し、時にはサラリと語ってやる必要がある場合もあると思う。むろん、アフター・ケアは大切であるが、同じことは親にとつてもいえる。

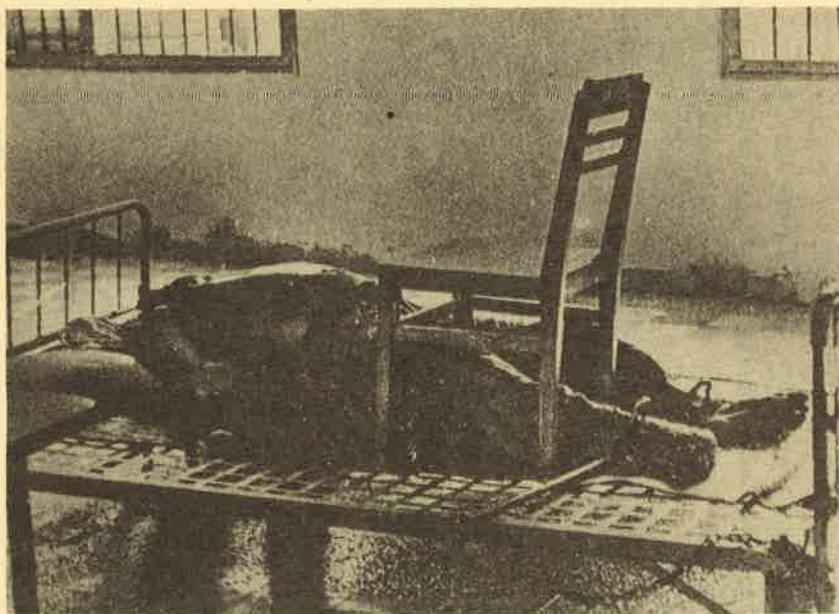
ところで、気にかかるのは(3)の①男女の特性と役割の指導である。著者は「男女が互いに尊重し、協力し合う態度」を育むと述べているが、私には、この問題をどう考え指導するかがまさしくこれからの性教育の重大な分岐点になるように思える。著者はふれていないが、すでに周知のように「婦人に対するあらゆる形態の差別撤廃条約」においても、男女の伝統的役割分担の変更が男女間の完全な平等の達成に必要であると規定されている。家庭科共修の問題や女子教育問題（八一年一月の日教組教研集会で初めて独立分科会が設けられ論議された）とからんで性教育の側からの明快な対応が求められている。『これからの性教育』に戻れば、著者が（中学・高校生の男子は一度性的関係を持った女子には興味を失うことが多いのでこのことを教えておくことは）「性の純潔を守

るうえで大変有益なこと」と述べているところや「セックスは、雑誌やマンガ本に描かれているのとは違い、それ程楽しいものではないこと、人生には他にもっと楽しいことが沢山あること」を教えると述べているところなど、もう少し著者自身の考えを具体的に展開して欲しかったという気がする。

* * *

次にとりあげるのは奈良林祥著『現代性教育考』（国土社）と城谷正雄著『障害児の健康と性教育』（青木書店）である。あらかじめおことわりしておく、私のこの二者に対する批評の主要点は著者らの差別の把握の仕方にある。

言うまでもなく奈良林祥はかの『How To Sex』等の著者として高名であるが、今は家族計画協会主婦会館クリニック所長を務めている。さて、奈良林のこの書での主張は「性をも含めて人間という」言葉に端的にあらわれている。「私がこの本の中でいいたかったことを要約すればたった一つ、性をも含めて人間という」というこの単純な事実をわかつてほしい、ということだけです。この言やよし。そして、この書も全体としてみれば、すでに二〇年以上にわたる著者の性教育講演と医学的知識が調和してわかりやすい内容になっている。しかし、私と



しては三点ほどもつとつきつめて考えて欲しかったところがある。

第一に、著者は「性教育というものを、学校教育というものと密着させて考えたこともありませぬし、考えてもいません。むしろ、家庭教育の中に組み込まれるべきものだと、かたくなに思っている。」「性教育は、本来的には家庭が行うべきものであり、親の責任の範囲の中のものです。」と言いながら、別のところでは「中、高校生にとつての性は、親からの精神的離乳の完成にかかわりを持つているわけですから、その性を、親から教えてもらうというのは本来的におかしいわけです。」「従つて「親ではない他のおとなたち、例えば学校の教師や医師から教えられるというパーセントは、だからこそもつと高くあつて欲しいものだと思います。」と述べている。著者は幼児期は親が、成長してからは教師が指導するべきだと言いたいのもかもしれないが、読者としては混乱する記述である。もはや、親か教師かではなく、親も教師もという時代認識にたつべきではないかと思うのだが。

第二にこういう記述がある。「幼児期から、塾にゆかせ、お稽古ごとに精を出させるといふことは、子供たちを、あまりにも早く人間という社会的存在へとかり立てる暴挙です。もちろん、どの子供も、やがては社会的存

在へと仕立て上げられなければなりません。それは当然です。でも、そうした子供の社会化は、学齢期に達してからで充分です」。まず、私には著者の「子供の社会化」、「社会的存在」という言葉の意味がよくわからない。著者は家庭内にいる就学前の幼児は社会的存在ではないと考えているのであろうか。「『社会』を再び抽象物として個人に對立させて固定することは、なによりもまず避けるべきである。個人は社会的存在である。」——マルクス『経哲草稿』また、私には第一点ともからまってこの箇所が幼児は家庭で育てられるべきだというふうに読めてしまふのだが、とすると、現代の情況では、母親は子供が乳幼児期にある間は家庭にいるべきだという了解を暗黙の前提にしているといわざるをえない。著者にはフルタイムで労働し続ける母親の姿や保育所の問題がみえていないのかもしれない。

第三に次のような記述がある。「男女の平等という考え方は当然のこととされ卑近な例でいえば、国際的な女子マラソンの大会も開かれていた時代なのです」、「女の子に対しては、『あなたはどうぞせいまにお嫁にいくのだから、なにもカリカリ勉強してまで四年制の大学にゆくことないじゃないの』などといつてくれるのですが、男の子に對しては決してこういうことはいつてくれません」(傍点

筆者)。前者においては例が卑近すぎるといえば卑近すぎるし、後者においては女の子はそういわれるので「ラッキー」なのに、男の子はそういわれないので「アンラッキー」という著者の意識が見え隠れしている。私としては男女両性の自立という思想と、この視座からの現代社会における男女差別への批判的視点を著者と共有したいと思うのだが。

『障害児の健康と性教育』のまえがきによれば、城谷正雄も医師として二五年間ほど「障害児」と関わる生活をし、一〇年ほど前からは各地のろう学校・盲学校・養護学校で性教育の話をするようになったという。そして、青木書店のひとから「障害児のための健康と性について一冊にまとめてあなたの考えをぜひ書いてほしい。一九八一年は国際障害者年でもありますから、障害児に對する差別・偏見をなくすための啓蒙にもなるでしょうから——」と励まされて、この書を書いたそうだ。そう、まさしく、この書は「障害児」に對する「善意」で満ちている(注、城谷は「障害児」のカッコをつけていない)。第一部は「障害児の健康」と題され、健康づくりの方法にかなりのページがさかれています。このなかで著者は「障害児」に向つてこう言うのだ。「すべての障害児は、自分の障害を認め、のり越えて、その子なりの力(身体的

・精神的機能)を十分に出して、病気に負けず、笑いを忘れず、精一杯生きようとする努力によって、健康を克ちとれるのだと信じます。あきらめてはいけません。」「社会に出てひとに接していくためには、自分の身のまわりのことはなんとかできるようにし、ひとにめいわくをかけたなり、嫌われたりしないようにしなければなりません。このようなのを「虚妄の善意」あるいは「主観的善意・客観的差別」というのかもしれない。

第二部が「障害児の性教育」である。そのはじめのほうのところで「障害児」差別と男女差別をからめて論じている部分があるので、長くなるが、そこを紹介しよう。「男性も女性も、人間の価値には少しも変わりはありません。性差別などありませんし、差別してはいけません。ちやうど、障害のあるものが障害をもたないもの（普通者）から差別扱いを受けるということも、あつてはなりません。すべての人間は平等に人権をもっているのですから、障害をもっているということだけで差別扱いすることは許せません。男女差別も障害者差別も、長い歴史のなかで、階級制度がきびしかった封建社会の頃に人間が勝手につくり出したものが、現代の社会にもなおどこかに残っているわけです。」そして「この残りカスである差別感を一人ひとりの心のなかから取り除く努力をつづ

けなければなりません。」「ネバナラナイ」論理も意味のあるときはあろうが、基本的に私は著者のこのような認識に同感することはできない。差別を「差別感」として把え、「残りカス」と考える論理はどこかで聞いたような論理だが、このような論理は認識論的にも運動論的にも誤っている。このようなのを「ズブズブの観念論」というのかもしれない。

次に、自慰について述べているところで「男性のほうが自慰をするものが多く九〇%以上におよぶといわれ、女性には数少ないのですが、自慰の状態は男性よりかはにはげしいものです。」という部分があるが、この女性の自慰についての指摘の根拠としては何かあるのだろうか。私は、残念ながら、寡聞にして知らない。また、「障害児」への自慰の指導として『度々やつてると頭もからだもぐにやぐにやになるわよ』とやさしく扱っておきましょう。」と述べているが、私はこのような言葉で指導することは好まない。

最後に「精神が初めて起こったときそれを夢精というのです。」という記述があるが、ふつうはこのような説明はしない。初めての射精のことを精通といい、睡眠中の自然射精を夢精という。

いささか細かなところまで詮索しすぎという感がしな

くもなく、また、木を見て森を見ないという声も聞こえてきそうだが、私としても「障害児」の健康と性に心をめぐらす著者の心情には最大の敬意を払ってはいるのである。

なお、『現代性教育研究』十二月号が性についての「障害者」自身の声を掲載している。

* * *

佐藤ち江『うちの子は思春期』（亜紀書房）は医師として母子保健や学校保健の行政にたずさわってきた経験をいかして綴られたユニークな書である。ここに登場するサキコさんからケイコさんまでの多くの男の子、女の子は昔の私たちであり、今すれちがったばかりの子供たちである。図や表は一切使わずに思春期のからだや心そして性について語りかけてくれる心なごむ書である。

黒川義和・白井将文『思春期の男の子をもつ母へ』（日本家族計画協会）は両者の常識と経験に裏付けされた好著である。これまで女子に比べて閑却されがちであった男子の思春期について美しく記述されている。

徳江政子『親と子の性教育相談室』（明治図書）は性をめぐる悩みや問題に回答するという構成になっている。

一九八一年に発行された性教育書には以上のほかに、現代日本

社）、ドクトル・チエコ『てれないでお母さん』（白石書店）、訳書としてドクトル・チエコ監修『中国式性教育』（日中出版）、コレソフ、セリヴェロワ著・柴田義松監修『性の発達と教育』（新読書社）等がある。なお、他にまだあるかもしれないが、私には確認できなかった。

* * *

八一年は人間の性に関する書の刊行もあいついだ。たとえば、昨年の『ウーマンズ・ボデイ』に続く『マンズ・ボデイ』（鎌倉書房）、『現代の性』（日本評論社）、『心とからだの百科事典』（講談社）、『人間の性』（有斐閣）。これらの書の詳しい紹介は次の機会を待ちたい。

* * *

最後に八一年の私のささやかな体験を書きとめて、このレポートを終わりにしたい。私は九月から大阪府立婦人会館で開かれた「結婚を考える」という連続五回のセミナーに参加し、性（セクシュアリティ）についての問題提起をする機会を得たのであった。その際、セミナー出席者（私のほかにもうひとり男性がいた）の会話において、はからずも露呈されたのは、男性と女性との間でいかに性についての対話が感性的にも内容的にも成り立ち難いかということであり、性についてのフランクな対話ができないように育てられ生きてきたか、ということ



であった。性についての情報といえばマスコミを通じた情報（か同性からの情報）しかないという情況のなかで、男性と女性はお互いにマスコミという媒体を通して、間接的に性情報のキャッチボールをしていたのであった。今こそ、性をめぐって男女の肉声の直接的対話を、連帯を。そして、教師は生徒と、親は子供と、性についての書をもて、ともに語れ。

（こしろ せいいちろう・大学院教育学専攻）

——書評——

ロラン・バルト 『文学の記号学』（花輪 光訳 みすず書房 '81年）の快楽

書評と／＼の戯れ

後藤 尚人

『文学の記号学』には、コレージュジュ・ド・フランスで一九七七年一月七日にバルトによって行われた講座「セミオロジー・リテール」の開講講義『ルソン』（一九七八年スイユ社刊）の全訳、及び、訳者花輪光氏の解説『文学の復権』が収められている。したがってこの『文学の記号学』について書評をするということは、当然のことながら、『ルソン』と『文学の復権』について語ることになるのだが、『書評』の「書」が「本」ではなく「テキスト」であり、「評」が「解説」ではなく「批評」、「クリティック」である以上、我々が目指すのは「テキスト・クリティック」（各版のヴァリアントを見つけては

喜んでいるあの「テキストクリティック本文批評」ではない、つまり、批評的テキストなのである。

そこでこのテキストとしての「書評」を導くために、『ルソン』には「要約」を、『文学の復権』にはささいな「所見」をあてがうことにし、『バルト・ルソン・ユートピア』への前座にすることにした。

ところで『ルソン』は要約可能であろうか。かつてポール・ヴァレリーは、「詩とは反対に小説は要約され得る。」（『ヴァリエテ』「ブルーストに捧ぐ」プレイヤード版I、七七二頁）と言った。言い替えれば、「詩は要約

され得ないもの」なのである。この詩／小説の対立は、バルトによれば、エクリチュールとエクリヴァンスによつて説明される。つまり「要約とはエクリチュールの否認」（『作家、知識人、教授』テル・ケル四七号、五頁）なのである。しかしエクリヴァンスの方はその思想ゆえに要約可能となる。これから明らかにされるのであるが、『ルソン』はエクリチュールとエクリヴァンスが織り成すひとつのテキストなのである。したがつて『ルソン』の要約とは、エクリヴァンスで書かれた部分のみのまとめとして読まれるべきである。

ロラン・バルト『ルソン』 要約

『ルソン』（花輪訳『文学の記号学』）は大きく六つの断片から成り、ひとつのテキストを形成している。

第一部では、コレージュ・ド・フランスに迎えられ、ことが名誉である以上に「喜び」であること、「権力の外側」の場所へ入る喜びであることを述べ、この講座が「権力」への問いかけであることを示す。第二部ではその権力が「複数」であること、「ファシスト」でしかない「言語」のもとで権力に立ち向かうには「言語でまますこと、言語をだますこと」しかなく、その行為が「文

学」と名づけられる。第三部では文学を(一)「マテーシス」(二)「ミメーシス」(三)「セミオーシス」とに分け、(一)では「知」を背負った文学が、科学と人生との距離を埋め、(二)では再現不可能な現実を断固として主張する文学の「ユートピア」を打ち立て、権力から身を守る手段は「固執すること」と「転位すること」だと語る。第四部では(三)について内部分裂からくる言語学の解体作用として「記号学」を定め、その場を「テキスト」に求める。第五部では、学問ではなく、諸科学に仕える消極的記号学、芸術家として、「記号」へと向う能動的記号学の立場を述べ、六八年以後もはや守られることのない文学へ今こそ進むのが、新たな書き手による「セミオロジー・リテール」（『文芸記号学』）なのだと言つて。第六部では、バルトが「新たな人生」を歩み始めること。それは、「学んだことを忘れてゆく」という経験であり、「サピエンチア」（『叡智』）と呼ばれる。つまり、「いかなる権力もなく、少しの知識、少しの知恵、そして、できるかぎりのあじわいをもつこと」である。

花輪光『文学の復権』 所見

『文学の記号学』には、訳者花輪光氏の『ルソン』と

ほぼ同じ分量に相当する親切な解説がついている。これはかなり大がかりな解説であり、バルト紹介から『ルソン』の講成、権力について、文学とエクリチュール、コンテーション、テキスト、メタ言語、記号学の功績、エクリチュールとしての記号学など、バルトの全体像を描き尽さんと、バルトのほとんどの著作、論文からの引用を試み、縦に横に論旨を繰り広げ、バルトに関する幅広い見識を現出させている。

花輪氏の方法は、『ルソン』の表面を水平にたどりながら、しばしば垂直の次元へと説明の糸口を求めているようである。そうしてできたものは、『ルソン』読者への



参考資料として、つまり作品を読み取ってゆく上でのサブ・テキストとして非常に重要性を帯びてくるのである。ところが『文学の復権』は「解説」であって「批評」ではない。「批評」とはその対象に向けて自己を能動的におぶつけてゆく態度の所産なのである。その時、対象はもはや「プレテキスト」でしかなくなり、浮かび上がってくるのは書き手自身の姿なのである。

しかしながら、『文学の復権』を通して感じられるのは、花輪光というバルトについてよく知っている人がいるということだけである。これは「解説」が持つ宿命であり、今それを「批評」と比較するのは場違いであろうし、だいいち『文学の復権』は、はっきり「解説」と名付けられており、その表題通りの意味が十分に伝わらない（読み取れない）という点を除けば、バルトについての入念な手引き書としては立派なものだからである。

けれども、文学に携わっている人間がバルトを読み、バルトについて学び、なおかつ自らの居場所を「大学」に見いだすとするならば、『ルソン』を読み進めてゆくうえで、山口昌男氏に倣って「なぜそのような本が自分または自分たちによって書かれなのかと真剣に問い質すこと」（『本の神話学』中公文庫、九頁）が必要であろう

と思われる。

バルトはただ語るためだけにそこにおり、聴衆はただそれを聞くだけであり、いかなる義務も権利も存在しない解放された場において、それはもはや理想的な理想の「講義」なのである。いったいバルトはあれほどの聴衆をどのようにして絶えず引き寄せ続けたのか。はたしてそのような文学の講義が我々の大学に存在するのであるか。大学における講義が、「文学の講義」が崩壊しつつある今、今こそそれが問いただされる時なのである。

バルト・ルソン・ユートピア

リュ・デ・ゼコールに面した正門に入り、右手の廊下を奥へ進むと、歴史の中に燦然と輝く学界の名士たちが聴衆を魅了した理想郷に出る。ソルボンヌの荘厳で重苦しい階段教室に比べ、ここは、建物自身から受ける印象とは違い、近代的な「明るい部屋」である。そう広くもない教室はすでにこの日を待ちわびた人々で埋めつくされている。一九七七年一月七日、我々はコレージュ・ド・フランス第8教室にいたのだ。

これから繰り広げられるのは、ロラン・バルトの講座「文艺記号学」の開講「講義」である。我々はエクリチ

ユールの欲望が暗闇の中から突如現われ消えてゆくその瞬間を垣間見ることになるだろう。

いったいこれから何が行われようとしているのだろうか。我々は講義を聞くのだろうか。あるいは講義録を讀み進めてゆくのだろうか。確かに講義は聞くものである。そこでは人が語り、人々がそれに耳を傾ける。それはまるで演劇空間のようだ。ところが講義には演劇のスペクタクルは、俳優たちの目をみはるような演技はない。だがその日、何百という観衆に囲まれて、バルトは確かにスターなのである。人々は凱旋する英雄であるかのようにバルトを眺める。しかし観衆がひきつけられるのは見るスペクタクルではなく聞くスペクタクル、つまり言葉の芝居なのである。

こうして我々はバルトを聞く聴衆となる。今、バルトは喋っている。そしてその声はかげろうのごとく生まれ、消えてゆく。声は瞬間の中に姿を現わし永遠の中へと去ってゆく。そこに声は自分たちの住処を見い出すのである。「ここでは、すべてが秩序と美でしかない」（ボードレール『旅へのいざない』）のであり、声たちはお互いに手を結び、ひとつの社会を作り出す。この社会には「テクスト」という名前がつけられている。

だがバルトはいったい何を語ったのであろうか。なるほどバルトは喋っている。しかし同時に彼は読んでもいるのだ。彼は原稿に目を通し、それを読み上げる。彼は喋るためには読み、読むためには書く。つまりは書き、そして語るのである。バルトの講義は語られたものであると同時に書かれたものである。そしてこの書かれたものは確かに「テキスト」なのである。バルトはテキストを語ったのだ。

今や我々はテキストの前におり、観衆から聴衆へ、そしてついに講義の読者となった。しかし我々の前にあるテキストは、バルトが書いたものでも、語られた声たちが織り成すものでもない。我々が目指すのは、バルトに書かれ、かつ語られた二重の「テキスト」なのである。このテキストは『ルソン』と呼ばれ、一冊の「本」でありひとつの「作品」であるが、これから問題にされるのは、正に「テキスト」としての『ルソン』なのである。

そもそも講義とは横柄のものである。講義は教える者と教えられる者たちとの関係の中に居坐っている。教える者は教壇に一人、教えられる者たちはそれに向い合い群生している。講義はこの不均衡を正当化しなければ満足しない。たとえ何百人が教える者を睨みつけても、両

者の関係は常に一対一である。未知の相手に向って、教える者はたった一人で出向いてゆく……

また、講義は両者の間に階級を強要する。教壇は上にあり、そこから学問のかけらが投げ出され、落ちてくるものを人々は受けとめる。このベクトルに逆流はない。つまり講義とは力関係の確認なのである。

したがって教える者とは、「教者」あるいは「強者」である。教えられる者とは、本来、学ぶ者、「学者」だったのである。ところが今日、大学において、強者と学者が手を結び、教える者の場を奪い去ってしまった。彼らは「教授」と呼ばれ、絶対的権力としての単位認定権を振り回す。これは彼らの最後の武器であり、教育の場から数々の特権が失われてゆく現在、教授の唯一の聖域である。また学者でもある教授たちは、一方ではその名のとおり確かに「学ぶ者」であるが、もう一方では、その昔、教えられる者たちであった頃の懐しき敬称であり、教える者となった今、彼らはもはや「学んだ者」でしかあり得ない。いったい本来の教者、教える者たちはどこへ行ってしまったのであろう。——いや、確かに大学には立派な学者と同じく、立派な教育者たちもいるのだ。しかし大学がその権威を主張する以上、教育の場であると言いつける以上は、教授たちは「超人」でなければなら

ないだろう。「教授」とは学者であり教育者であらねばならない。

コレージュ・ド・フランスにおいて講義は別の容貌を帯びる。「ここでは教師は、ただひたすら研究し語る——〔…〕——以外、何の活動も行わず、判定することも、選別することも、進級させることも、管理された知に仕えることもない。」（『文学の記号学』八頁）そこにはもはや単位認定権は存在しないが、それと同時に教える者は一切の義務から解放され、ただ「自分の研究を夢見ながら寝言を言う——声高に語る」（同書八頁）だけという「とほうもない特権、ほとんど不当とも言える特権」（九頁）を獲得する。この特権は権力を追い払うために働く。教えられる者は、なんら強制されることなくコレージュ・ド・フランスへ足を運ぶ。そこには学費も学歴も学位も何も在りはしない。教える者と教えられる者との間の階級は消滅し、ベクトルは上下ではなく水平軸にそって動く。コレージュ・ド・フランスは「権力の外にある場所」（九頁）なのである。

しかしこの権力の外側から講義を行い、講義を続けるためには「受講者の忠実な出席」（五一頁）が要求される。そして、それを左右するのは講義の内容だけなのである。

ある。大学の講義が学生の出席を強制させながらも生氣を欠いている現在、開始の二時間も前から聴衆が詰めかけ席を取り合うという状態が続いたバルトの講義は、知的世界におけるほとんど奇蹟の業である。

『ルソン』はその講義の展望についてまずこう語っている。「たとえ権力の外にある場所から語ったとしてもおよそ言説には、権力（支配欲、*libido dominandi*）がひそんでいるのである。そこで、この授業が自由なものであるとすればするほど、ますますつぎのように自問することが必要であろう。いったい、いかなる条件のもとで、いかなる操作によつて、言説は、いつさいの占



有欲からのがれることができるのか、と。「……」實際、この授業において、これから間接的に、しかし執拗に問題になるのは、権力である。」(九一—〇頁) コレージュ・ド・フランスは「権力の外にある場所」であり、教える者と教えられる者との上下関係は存在しないにもかかわらず、講義を始めるやいなや権力が顔をあげる。「権力は、こちらで追放され、衰えたかと思うと、あちらにふたたび現われる。権力は決して滅びないのだ。」(一一二頁) というのは、あらゆる場所、時間、人間を越えて、権力は言葉の中に潜んでいるからである。「人間が存在しはじめて以来ずっと権力が刻みこまれているこの対象こそ、言語活動である。」あるいはもっと正確には、言語活動の強制的表現としての言語である。」(一一二頁)

そしてバルトの講義が立ち向ってゆくのはその言葉の権力に対してなのである。つまり、言葉∥権力を用いて権力∥言葉へ戦いを挑んでゆくのである。はたしてそんなことが可能なのだろうか。かつてキルケゴールとニーチェがその不可能へ挑戦したとバルトは語り、「しかし、信仰の騎士(「アブラハム」)でもなければ、ニーチェ的な超人でもないわれわれに残されているのは、もしこう言つてよければ、言語を用いてごまかすこと、言語をごまかすことだけである。たえず変遷回帰する言語活動の輝

きにつつまれた、権力の外の言語を聴き取らせる、この健全なごまかし、この肩すかし、この壮麗な畏、私としては、それを文学と呼ぶのである。」(一七一—一八頁)と講義の方行/法を告げる。それはまるで、外部からの圧力に対して固く扉を閉ざし、その中で平然と独自の制度を築き上げている大学社会においては、もはや体制の内部分から湧きあがる改革のエネルギーでしか自らを変えてゆくことはできないのだと我々に告げているかのようだ。バルトは言葉に対し、内側からその盲点を暴き出してゆくのであつて、彼はかつてモーリス・パンゲ氏が言つたような「社会の観察者」(一九八〇年一〇月三〇日関西日仏学館における講演)というよりはむしろ「告発者」として扱えられるべきであろう。

この告発者は、言葉のからくりを摘発する。文学は言葉のだまし合いである。権力を封じ込めるには、権力をだますことから始めねばならない。そのためにも講義は文学を採用し、「テキスト」を語り出すのである。しかしだまし合いの中に真実の証言はない。テキストが何を語ろうともそれらは偽証であり、言いわけなのである。そして、うまくだますこと、巧みな言いわけ、「プレテクスト」のみが相手に打ち勝つことができるのである。バルトの講義が文学を指す以上、テキストは「プレテク

冬期、新編集委員を 募集します！



スト」、きつかけとして認められねばならないだろう。というのも「プレテクト」として語る時にはじめて文学のだまし合いが成就されるからである。

『ルソン』は文学を擁護する。人間のあらゆる姿を、ある時は冷酷に、ある時は感情を込めてうたいあげた世界は、現実とその「虚像」である文学以外にはない。あらゆる学問が、学問として生き残るために、各自の境界を定めたのに対し、文学には限界がない。「仮に何か極端な社会主義ないし蛮行によって、われわれの学問が、一つを除いてすべて教育の場から追放されることになったら、救い出さなければならぬのは、文学の学である

う。というのも、文学の記念碑的作品のうちには、あらゆる学識が含まれているからである。」(二〇頁)あらゆる領域を埋めつくそうとする文学の飽きることなき欲望は、人間の欲望そのものなのである。

ところが、この限りなく広がり続ける文学と共に生きながら、大学の文学者たちが、もはや温かくもない湯船につかっただまま、カゼをひくのを恐れてあがろうとしないのはなぜか。彼らは専門の名のもとに、文学世界を広げるところか、より小さなものにしようと懸命なのだ。なるほど彼らは学者であるが、それは文学を知っているというよりも、文学がかつて扱ったもろもろの学問――

・資格 関大生協の学生組合員であること。

・条件 学内、外に論争を創出させるべく、「書評」

誌の内容企画、編集、発行をやってみたい
と思っていること。

・方法 現在三叉路付近にある生協プレハブの一つ

の組織部内書評編集委員会に来て下さい。
編集委員が面談します。(尚、編集委員に
は若干の活動費が支給されます。)

「というのも、文学の記念碑的作品のうちには、あらゆる学識が含まれている」——を知っているがゆえに学者なのである。もちろん文学を知る為にはそういった知識は必要であるが、彼らの急所は文学そのものを知らない、文学を實踐しないことなのだ。

すでに言い古された神話ではあるが、文学は学問ではない。文学は限りなく、飽くことなき欲望に励まされながら、絶えずだまし合いを続けている。「昔から現代の前衛の試みにいたるまで、文学は、あるものを再現することに熱意を燃やしている。それは何か。乱暴な言い方をすれば、それは現実である。」(二五頁)しかしながらこの現実ほど語りつくされ得ないものはない。秩序と無秩序とが交叉する尠大な社会を、どうして描きつくせるはずがあるのか。それでも文学はこの不可能性を追求し、断固としてそれを主張し、「屈服することを欲しない。決して欲しないのである。」(二五頁)

この不可能性を夢みる文学は正気の沙汰ではない。狂気と偽りが支配する世界の中で、文学の学問を論ずる文学者たちは、学者である限り文学の手前にいる。そして彼らの虚像は、あの五月と共に崩れてゆく。「一九六八年の五月革命が、教育の危機を出現させた。古い諸価値はもはや伝えられず、通用せず、感動させない。文学は

神聖なものではなくなり、諸制度も文学を保護することができず、文学を人間性の暗黙の手下として押しつけることができない。」(五〇頁)

そのような下界の学者たちに比べ、「いわば「歴史」のこの上もない策略の一つ」(八頁)、学問の最高峰として君臨するコレージュ・ド・フランスで、この日、熱烈な崇拜者たちに迎えられたバルトは、時代を超越した知識人であり学者である。彼もまた文学と共に生きる文〔学者〕といえるが、しかし文学者ロラン・バルトは、文学の学者であると同時に〔文学〕の者、文人、作家でもあるのだ。そしてエクリチュールの解釈によれば、バルトは *écrivain* (著述家) でありかつ *écrivain* (作家) である。この二重の意味において我々はバルトを〔文学者〕*«crivain»* と呼ぶのである。

文学者バルトは学者としてセミオロジを武器にする。しかし文学者は絶えず文学のあちら側を指して講義を押し進めてゆかねばならない。かつてバルトの講義があれほどの信者たちで埋めつくされ続けたのは、「何と呼んだらよいか。作家か、知識人か、書き手か。それはもはやわからない——あるいは、いまだにわからない。」(五〇頁) という文学そのものを知り、文学で語った「新

しいタイプの人々」(五〇頁)、『文学者』(『écriture』)の出現があったからである。作家は文学を教えられず、学者は文学では語れない。バルトによって初めてこの二者が融合し、文学の講義が可能となった。彼は文学のユートピアを目指し、セミオロジーに文学的戦略を用いながら、講義を文学へと押し上げてゆく。そしてこの言葉のからくりの裏でセミオロジーは密かにプレテクストとして立ち現われ、『ルソン』の欲望のもとでセミオロジー・リテレールの彼方へと鮮かに変貌を成し遂げるのである。

確かに五月革命は教育の場から文学を崩し始めたが、



今、ここコレージュ・ド・フランス第八教室では、「もしこういったほうがよければ、文学が破壊されたということではない。文学がもはや守られていない、ということである。それゆえ、いまこそ文学に向って進むべきなのである。文学の記号学とは、そのための旅であって、相続人のいない自由な風景のなかに降り立つことを可能にするものであろう。〔……〕いまこそ、退廃の時であると同時に予言の時、おだやかな黙示の時、もっとも大きな享樂が得られる歴史的瞬間なのである。」(五〇—五一頁)

こうして『ルソン』は文学のユートピアとなり、そのテクストはプレテクストへと生まれ変わる。

(ごとう なおと 文学部四回生)

—— マスコミに見る優生思想 ——

『典子は、今』を撃つ！

関西大学I部 障害者解放研究会

1 今、「障害」概念を、再び問い直す必要性

私たちの生きている社会は「働く」ことよって得た「報酬」よって「生活」を成り立せてゆくしくみになっている。「働く」ということには一定の枠がありその枠にあてはまらない者、働けない者は社会から締め出される形になっている。人間の価値の尺度が「生産性」のみよっているのである。「できないこと」がいけないこと、不幸なこととし、不幸だから生まれてこない方が良くと考えられてしまっている。

肉親による「障害」児殺しなどが起こっても、「生きていても不幸なだけ」とむしろ、殺した側に同情を寄せられる場合が多いようである。「障害」と不幸を何も疑いもせず結びつける考え方、できるものが優れていて、できないものは、その存在さえも否定されるという、人々の意識の奥深くに潜む優生思想に対して「私たちは「障害」を持つことがなぜ不幸なのか、と原点に立ち戻って考えてみなければならぬと思うのである。

とりわけ、一九八一年、国際障害者年の波に乗って、マスコミを中心とした動きが活発になってきたが、「国障年記念番組」と称して報道されるその内容は、優生思

想を一掃していく方向での啓発であるところか、逆に、それを助長、拡大していくものがほとんどであると言えらるだろう。マスコミに見る優生思想の題材は、数え上げればきりが無いが、ここでは、特に話題になった映画である「典子は、今」を題材に使い、その内容がどういふふうに「障害者」抹殺につながっていくのかを見ていきたいと思う。

2 「典子は、今」にみる「障害者」抹殺思想

物語の設定としては、主人公の典子が、サリドマイド障害の為に、両腕がないにもかかわらず、両腕の代わりに足を使って、食事やミシンや着替え等を何でもこなしていく、すなわち「障害」を克服している「姿を全面的に描いており、いわゆる「がんばる『障害者』」の生きざまが中心となっている。この「がんばる『障害者』」というのは、要するに「健全者」により近く、まわり（健全者社会）に迷惑をかけない「障害者」の事であり、それをこの映画は一貫して美しく描いているのである。「がんばる『障害者』」といっても、それは、全ての「障害者」の数から見れば、ごくわずかなひとにぎりであるにもかかわらず、この映画だけでなく、マスコミ全体の

取り上げ方の姿勢として「がんばる『障害者』」のみを美化し、そうでない大多数の「障害者」の事や、あるいは、本当の「障害者」の生きざまというものには、目を向けない傾向が顕著になっていると言える。

これらの事を踏まえて、以下、場面、場面を追いながら、見ていくこととする。

3 「障害」児は、「不幸」児という公式化

物語は、主人公の典子が高校三年生の時から始まる。卒業も間近のある日、クラスの友人を前に典子は、自分の生いたちを語る。

一九六二年一月、松原典子は両腕が退化したサリドマイド児として生れた。彼女の父親は、我が子の誕生を喜ぶのもつかの間、「障害」児と知り、一転して暗い表情になる。父親は医師に向かつて、「生きていても不幸になるだけだから、いっそ、殺してくれ」と口走る。医師の「我々の力ではどうしようもない。運命と思って下さい。」という弱々しい対応——サリドマイド児。一九五九年から六二年の間に、日本を初め、数百人の子供達がこのレットテルを持って生まれている。ベルギーでは、生れたばかりの我が子を自らの手で殺した母親が、「こ

の子に未来はない……」と発言したという。——典
子の父親はさらに、「奇形では子供がかわいそうだ。退
化して用をなさない腕なら、切断して欲しい。後で
子供には、交通事故か何かでなくしたと言ってやった方
が、せめてもの救いだ」と言う。両腕の切断。その父親
は、その後、典子と母のもとから去ってしまう。

ここまでの場面、すなわち、一人の「障害」児が
生まれた直後を描く場面は、全体を通して、非常に
暗い映像になっており、そこには「障害」を暗いも
のとしてみていく思想性が表われているといえる。

まず父親の最初の発言には、露骨に「障害者」殺し
の思想があらわされており、それに対する医者の方々
しい対応とも合わせて、映像全体が、「非常に父親
の気持ちもよくわかる」「殺してやってくれという
気持ちをはわかる」といった感銘を受ける形で写し出
されており、次に、「手を切ってくれ」という父親
の発言はサリドマイド障害という先天性異常に対す
る偏見であり、もともとは、「健全者」であったの
だと思わせたいという発想に基づいている。いずれ
にしても、「障害者」の存在を否定している事には
変わりはなく、さらに実際に腕を切断したという事
実を通して、映像自体がそれを正当化する形になっ



ている。

典子と母親にとつて、最初によつた大きな壁は、小学校入学。両親のない事から、普通校は無理だろうと養護学校を紹介されるが、そこでも、トイレに一人で行けない事だけを理由に、入学を拒否される。その後、小学校（普通校）の校長と教師が典子のことを知り、簡単な知能テストの後、その校長は、「この子に障害はない、手がなくて不便なだけだ。」と入学を許可する。以来、手の代わりに足で字を書き、箸を使い、友人や先生の助力を得ながら、学校生活を送る。

この場面は典子の就学時の場面であるが、結果的には、典子は普通校で「健常」児と共に学ぶようになるわけである。しかし、「障害」児である典子が普通校に入れたという事自体、非常に特別な例として扱われている。つまり、幸運中の幸運で受けられた普通校の簡単な試験において知能検査をされるということ自体、一人の「障害」児が学校の勉強についていけるかどうかを判断しているわけであり、これはまわりの「健常」児に対して、どの程度迷惑をかけるかはかっているのと同じである。故に、知恵おくれや、重度の「障害」児を含めたところで、普通校における統合教育を積極的に推進するのでは

なく、あくまでも「障害」をさらにふるい分けて、選ばれた「障害」児だけを受け入れていくという姿勢にもつながっている。また、校長が「障害」という言葉をどういう意味で使っているかということについても疑問が残る。彼の発言は逆にとれば、「障害」があると認められる子供は受け入れられないという事にもなるし、例えば、「情緒障害」児を受け入れるかどうかとなれば、この校長は、どう対応したであろうか？……

典子は、クラスの友人を前に、生いたちを語った後、最後にこう語る。「私は生まれると同時に、二つの不幸を両親のもとに持つてきました。私のような障害を持つ子供が生れたこと、そして、そのために両親が別れてしまった事です。」

この場面で彼女は、「障害者」という存在をもっとも不幸な存在だとして、まわりに迷惑をかけたのも自分もつ「障害」という事の責任だとして扱えている。「障害」があるが故に不幸をもたらしたのではなく、「障害」が不幸につながっていく現在の「健全者」中心社会、「障害者」差別社会がむしろ問題ではないのだろうか？……



4 「健全者」社会に、仲間に入れてもらえないのか

典子には、大学に入ってグラフィック・デザイナーになる夢があった。しかし年をとっていく母を見て、こう宣言する。「今日からなんでも自分でやってみる。お母さんの手はもう借りない。」

熊本市が市役所の職員を募集しているのを知り、典子は受験する。26倍の難関をくぐりぬけて市役所の福祉課に勤務することになる。足で書類をめくり、電話を取る。すべてが順調にいっているようにみえた。ある日通勤バスの中で、体を支えきれなくなって転んでしまう。親

も友人もいない。必死で立ちあがろうともがく。

その夜、典子は旅に出ることを決意する。文通をしていた広島県の阿多島に住む小児マヒの少女、富永みちこを訪ねようと思ったのだ。しかし母親は反対する。「切符はどうして買うのか？食事は？一人でできないくせにおまえの足は手のかわりはするけれど、外へ出たら何もできないじゃないか！」しかし典子は、「やってみる。はずかしくない。」と言い張る。

典子の旅は自分の「障害」を他人にさらし、説明して助力を得なければ成立しない。旅の過程で典子は、通りすがりの人に切符を買ってもらい、車中ではサンドイッチを食べさせてもらう……。

典子が母親に対して何でも自分できると宣言してから、彼女は歯磨きや洗面等、様々な事をたった一人の力でやっていく。ここで映像は、「がんばる『障害者』」としての側面を長々と描いていく。そしてバスの中の場面で、「がんばる『障害者』」の限界、すなわち「障害者」が周りの「健全者」に協力を求めていく事の必要性が描き出されている。そして、彼女はそれを旅の過程において実行していく。

旅の場面においては、そういう意味で一定評価はできる側面をもっているが、ここでも次の点に着

目しなければならぬだろう。それはひとつに、「健全者」に協力を求めていく上で、それが「障害者」個人の責任であるという側面が非常に強く描かれている事。二つに、こういう事ができる「がんばる「障害者」、あるいは、「軽度障害者」のみが、「健全者」と共に生きていける、言いかえれば「健全者」社会の仲間入りができるというように描かれている事である。故に、一人で街にも出れない重度「障害者」に対する視点が欠落しているのである。ここでむしろ最も問題にせねばならないのは、社会が制度上、構造上において、「障害者」を排除しているという事ではないか。すなわち「障害者」が一人で街にも出れないのは、介護の公的保障制度がないというところが一つの大きな原因であり、また階段や狭いトイレなど、街の構造自体が「障害者」を排除しているという事も大きな原因なのである。

この場面では「障害者」という存在がいて、「健全者」という存在がいて、両者が歩み寄って共に生きていく社会というよりも、「健全者」社会に「障害者」が入っていく、「障害者」が仲間に入れてもらおうという形で描かれていることに注目せねばならない。みちこの家に着いた典子の目に飛び込んできたのは、

壊れた車イスとみちこの遺影。ボーゼンとする典子。

みちこの母と兄は、熊本から訪ねてきた典子を暖かく迎える。スイカを足でスプーンを使って食べる典子を見て、みちこの母は泣き出す。翌日、みちこの兄と海へ出た典子は、みちこの死の理由を尋ねる。みちこには好きな人がいたが、自分の「障害」を悲観して何も言えずにいたらしい。みちこの気持ちを知らない相手は、広島に行ってしまった、その夜、みちこは車イスのまま海に身を投げる。みちこの兄は典子に対して、最後にこう言った。「妹は障害に負けた。おまえは死ぬなよ。」物語はここで終わる。



旅先におけるこの場面では、二人の「障害者」が見事に對比されている。すなわち、みちこは「障害」に負けて死んでいき、典子は「障害」を克服し、「がんばる『障害者』」として生きていくのである。

ここでは要するに、「障害者」はみんな「障害」を克服して頑張らなければならないのであり、「健全者」に近づいていかなければならないのであり、それができない「障害者」は、みちこのように死んでいくのだというふうに描かれているのである。故に、みちこの死はみちこ自身の責任にされ、彼女が「障害」を悲観しなければならなかった、そのようにさせていった状況というものの問題性を全く追求していないところに注目する必要がある。また、みちこという「障害者」像が、実は、現在の大多数のごく普通の「障害者」の状況であるということも忘れてはならない。

以上、場面を追ってきたわけだが、全体を通してこの映画を見ると、大きく二つに分ける事ができる。それは、彼女自身が生まれてから小学校へ入学する場面ぐらいまでと、それから現在の場面である。前半の場面では、彼女自身、ほとんど自分で何もできな



い「障害者」だったのであり、それは同時に、大多数の「障害者」の状況というものを示している。後半の場面では彼女自身、足で身の回りの事を何でもやるようになり、周りの「健全者」に迷惑をかけるように、ごく少数の選ばれた「障害者」の状況であるという事。そして問題であるのは、この映画自体が映像効果等を含めて、前半においては一貫して暗く描かれ、後半においては非常に明るく描かれているという事である。まさにこの映画は、「障害者」のあるべき姿」として、「典子」という「がんばる『障害者』」を置き、すべての「障害者」はできる



現在のこの資本主義Ⅱ生産第一主義において権力にとつては、「働ける人間」が良い人間で、「働けない人間」はダメな人間とされる。そこで積極的に、この二つを厳密に分けていく事を行なっていくのである。

限り「健全者」に近く、すなわちまわりに迷惑をかけるない「障害者」を目指して努力すべきであり、それができない大多数の「障害者」は不幸な存在であると言っているのと同じなのである。

「障害者」の中でも、「働ける人間」は低賃金、劣悪な労働条件におとしこめられ、その労働現場ではおおよその「障害者」は非人間的扱いを受けているというのが現実である。それに対して働けない「障害者」は、そういう人間だけ一集めにされて、人里離れたところ（養護学校、施設）、あるいは個別家の中に閉じ込められるか（隔離）、母子保健センター等をはじめとする一般的な母子保健医療体制の中で、胎児段階で「障害」児と判った場合、殺されていく（抹殺）という状況があるのである。

こういった権力による「障害者」隔離抹殺の動きを背景にして、実際に肉親の手による「障害」児殺しがひん発している。そしてそういった事件が起これば、殺された「障害」児の存在を抜きにして、殺した親に同情した地域住民が、減刑嘆願運動を行なうという現実までがある。この地域住民のもつ姿勢こそ優生思想Ⅱ「障害」児・者殺しを正当化していく論理の正体に他ならないのである。

映画「典子は、今」をはじめ、マスコミによる国障年記念番組、CM等での優生思想キャンペーンにおいては、ほとんど「がんばる」「障害者」、「健全者」により近づこうとする「障害者」のみが取り上げられ、美化され、あるいは「障害者」に愛の手を」という形で同情、あわ

れみだけを強調する事によって、ごく普通の「障害者」はダメな「障害者」、すなわち「健全者」こそ人間の本来の姿であつて、「障害者」は本来あつてはならない者とする発想に結びついていくのである。

そしてそれは、当然「生きていても不幸なんだからいっそのこと……」というように、実際に「障害者」を殺していく事を正当化していく事にもつながっていくのである。

私たちは、このような権力やマスコミによる「障害者」抹殺の動き、「障害者」殺しキャンペーンという現実を踏まえ、それと闘っていく上で、まず自分の内部にある優生思想をふっきっていく日常的な問いかけ、点検から始めていかねばならないだろう。

地域住民とは、まさに私たち一人一人のことであつたのではないのか。

日本中国

ことばの来往

その 8

芝田稔

“入試と漢字”から

日本列島はいま進字試験の季節に入っている。毎年このことであるが、大学入試では受験生の国語能力

が意外に低下している、ということがよく話題になるのである。中でも国語の表現能力、端的にいえば漢字の表記能力、それがどうもお話にならないというのだ。

優劣をつける入学試験であるが故に、漢字の一点一面にも注意を払わねばならぬように、その問題が作成されてあることはいうまでもない。厳しいのも無理はないの

である。だが、これが日常生活での実用文ならば、漢字に自信がもてない場合、無理に漢字を書かなくともよい。平仮名や片仮名を使って十分に達意の文章が書けるはずである。この点、日本語で書く文章は、便利この上ないのである。

ところが、中国語の場合だと、そうはいかない。漢字で表記する以外に、別の表記手段をもっていないからである。日本の当用漢字ともいえる中国での常用漢字は三千字を基本としており、新聞雑誌等に必要な活字となると大体六千字に達する、といわれている。

だから、中国での教育の出発点は、今日でもまずは漢

字からである。古来、中国の人びとにとって、この漢字がどれほど精神的な糧になつたことか、また逆にどれほど重い圧力になつたことか、漢字のこうした功罪を述べるとしたら、長篇の読物ができそうである。

それはともかく、一九八一年度中国での大学統一試験に現われた受験生の国語能力について、北京大学の採点指導グループは極めて批判的であつた。

それによると、千字以内の小論文を課したところ、四〇点満点で、二四点の合格点以上は、わずか三〇%に過ぎず、残りの不合格者中には、たつたの五点しか取れない答案があつたという。論文の内容は別として、作文法に合わない悪文や当字が目立ち、五百字ほどの文章の中で、文法的な間違いが一五箇所もあつたし、七千字の文章中に一九個の当字があつた。例えば前漢の歴史家、司馬遷のことを「史馬千」と書くなどは、その最たるもの。また五百字余りの文章で、最後まで一点の句読点もない、字んべら坊の白文、そして文末にただ一点、それも句点ではなく、コマの読点を打つてあつたといふもの等々である（『光明日報』一九八一・八・二四）。

昔はもつと厳しかった。一九三五年頃の話である。北京大学の入試の答案に「昌明、チャン（一声）ミン」立派で輝やかしいこと」と書くべきところの「昌」の字を

「倡、チャン（一声）ニ妓女」と書いた受験生がいた。たつたそれだけのことであつたが、言語学者の刘半農教授は、余程腹に据えかねたと見えて、それを非難する『打油詩』を発表した。これがきっかけとなつて、学内でその是非をめぐる論争が起つたことがある。たつた一字の誤字、だが、こともあろうに「昌」を「倡」と間違えたというので、おうぎょうしいことになつてしまつたのである。それにしても厳しい。

ここで、魯迅はこれをどう見たであらうか。――

教師が学生よりも漢字を多く知っているのは、当り前のことであり、学生が漢字を間違えたからといって、優越感をもつことはない。今の学生は字ぶことが多過ぎるのだ。技術を学んでいる学生が「昌明」を「倡明」と書こうが「留字」を「流字」と書こうが、よいではないか。学生の学んだ技術が社会に役立つなら。これは、よく考えてみると、漢字をすっかり学ばない学生の罪だともいえるし、またしっかり教えなかつた教師の罪でもある。だが、救い難い漢字こそ一番の元凶だ、という意味のことを述べている。（魯迅『芥介亭二集』より）

魯迅がこのように評した頃は：「いまの中国で漢字を知っているのは、全人口の十分ノ二に過ぎず、文章が作れるものとなれば、もつと少ないはずだ」と魯迅が見て

いた頃であった。それから半世紀近くも経った現在、中国での文盲率は低下しているはずであるし、簡略字の普及によって漢字習得も容易になっていくはずである。にもかかわらず、同じような誤りを繰返している、となると魯迅がいったように、漢字が存続する限り永遠に、こんな誤りが繰返されることであろう。

中国のナツメロ

昨年八月北京を訪れた知人の話によると、頤和園で昆明湖のほとりを散策していた時のこと、スピーカーを通して湖面を流れてくる美しいメロデー、その中に昔懐かしい「漁光曲、ユイコワンチュ」があつたというのである。「漁光曲」を直に知^{ぶか}っている年輩者のいうことであるから間違いはなからう。とすれば、教条主義の嵐が吹きまくっていた頃の中国と比較して、随分気分が緩和されていることが判るのである。

「漁光曲」——抑圧された漁民の苦しい生活を描いた同名映画の主題歌——は、解放後の中国では、再び返って来ることのない社会を画いた作品、という理由で締出しを食ったし、また台湾ではプロレタリアに同情する歌だとして御法度になったという、どちらからも嫌われた懐



しい名曲である。

昭和十年頃の上海で上映された映画「漁光曲」は、なんと九十日間というロングラン記録を樹立したのであった。ということは、この映画の内容が上海の市民からどれほど共感を受けたかを物語るものであり、五四運動以来の中国映画では特筆される作品の一つであったといえる。またこの映画をそれほど魅力あるものにしたもう一つの力、それはこの主題歌「漁光曲」にあった。しかも中国では初めて映画のヒロインである女優王美人がそれを歌ったのだ。彼女の甘い張りのある美しい声が、ゆるやかなテンポのピアノだけの伴奏に乗って抑揚豊かに物悲しく歌うのである。

歌曲は十二節から成る。歌詞は六、八、三、七言と長短句、計八十六字から成っている。〃働けど、働けど、暮らし、楽ならず、じっと見つめる、網と船〃といった、東海漁民の漁撈、生活の辛さを切々と歌い上げるのである。

歌は時代の象徴であるといわれる。この歌は資本主義社会の下にあえぐ資本家と封建漁民が同居していた半世紀前の上海の裏街^{ウラマチ}人生を反映する。今日の中国から見れば、この歌が反映する社会は、も早や悪夢と消え去っている。だがその悪夢の社会から今日の社会をつくり上げた過程を刻みこんでおくためにも、この歌は人びとの心



に留めておくべきだと思ふのだが、いかなるものである。少し長い歌詞なので、その一首だけでも紹介しておこう。

雲兒飄在海空，ユンアル・ピアオザ・ハイクン

魚兒藏在水中。ユイアル・ツァンザイ・スイチヨン

早晨太陽里晒魚網，ザオチエン・タイヤンリ・シャ

イ・ユイワン

迎面吹過來大海風。インミエン・ツイクオライ・

ターハイフォン

潮水升，浪花湧，チャオスイ・シヨン，ランホア・

ユン

漁船兒飄飄各西東；ユイチョワンアル・ピアオピア



オ・ゴー・シートン

軽撒網，緊拉繩，チンサー・ワン，チンラー・シヨン
烟霧里 辛苦等魚踪。イエンウリ・シンク・ドン・ユ

イズン

魚兒難捕租稅重，ユイアル・ナンプー・ゾースイ・

チヨン

捕魚人兒世世窮，プーユイ・レンアル・シーシー・

チユン

爺爺留下的破魚網，イエイエ・リウシヤダ・ポージュ

イワン

小心再靠它過一冬ノシヤオシン・ザイ・カオター・

芸は身を助ける？

クオ・イートン

平和な日々を送っているいまのわれわれには、日常生活の中で特に警戒心を高めて行動しなければならぬ、ということとは余りない。ところが、戦争に敗れた後に、なおその現地で暮らしている時は、生活の不安はもちろんのこと、いつなんどき、どんな禍いが降ってくるか知れない。そんな恐怖が、日本人であれば軍人ではなくとも、四六時中つきまとわれるのである。

敗戦の年の暮れ、北京でのことである。所用のため外出し宿舎へ帰る時間が遅くなり、しかも同じ宿舎に住む社員の家族を連れて帰ってくれと依頼されたのだ。その頃の北京城内は、昼でも日本人はできるだけ外出しないように、居留民団側から下達されていた。夜半ともなればなおさらのことである。

そこで、社員の家族を一台の「ヤンチョー、洋車Ⅱ人力車」に乗せて幌をかけ、自分は車夫と一緒に歩くことにした。物情騒然ということばがあるが、北京城内は正にその通りであった。

敗戦後、いち早く襲われたのは、北京神社であった。

なにしろ出征兵士は必ずこの神社に詣でて御祓みまがひをうけ賑しく日ノ丸の波に送られて行ったものだ。そのことを中国人は見ているし、しかも神社にいるあの白い服の人物が、日本兵士を操りかり立てて行った元凶だと、にらんだからであろう。神主さんこそ迷惑千万だが、敗戦という現実の中では、どうしようもなかったのである。

以後、どれほど大小さまざまの事件があったことか。その噂話には尾鰭がついて、居留民の間をかけ巡る。恐怖の種が蒔かれるのだった。筆者にもこんな経験がある。

今は亡き学友Y君と共に街へ出た時のこと、全く予期しないことで、わけの判らぬ役人から、わけの判らぬ引つ立てをくい、わけの判らぬ役所へ連行された。そしてすんでのことで、留置されるところであったが、その役所の幹部に納まっていた曾ての同僚中国人が現われたので、文句なしに放免されたのであった。それから間もない頃であっただけに、夜半の道行きは物騒この上ないものである。

「大街、ターヂエⅡ大通り」から「胡同、フートンⅡ横小路」に入ると、急に暗く静かになる。車夫との無駄話にも種が尽き、黙々と歩く。噂に高い北京市立第〇中学が近くになる。ここは難関だ。たむろする学生たちから検問されようものなら、それこそお手上げなのだ。



フト思いついたのが「探親投河」。流行歌ではない。紅
灯の巷で流しの芸人がよく唄った心中物の小唄。上手下
手は問題でない。中学生らにとつて関心の薄い方がよか
ろう。

提起了宋老三 ちよいと出ました、宋老三

両口子売大烟 夫婦がかりで、アヘン売り

一輩子無有兒 男の子には、めぐまれず

所生的女嬋娟 生まれた女子は、器量よし

.....

這奴年成那個 いまじゃとしごろ、この娘

二八十六歲阿 二八十六、いまさかり

起了一個乳名 つけた名前は、

就叫宋大蓮那 宋大蓮

こんな歌を口遊んで、校門前にたむろする中学生を煙
にまいた。因みに、この歌の一段が曲波著「林海雪原」
にも出ている。この小説では、こんな歌を唄う奴は、ろ
くな人間でないように描写されていて、その男は結局解放
軍兵士に捕えられるのである。だが私はこの歌のおかげ
で、中学生の検問を遁れたのであるから、ちと大袈裟で
はあるが「芸は身を助ける」というところか。

(しばた みのもる・中国文学科教授)

北京で生活して (七)

鳥 井 克 之

中国の大学・高等専門学校

中国では前回に詳細に説明したように、法学部、文学部、経済学部、商学部、社会学部、教育学部、工学部、理学部、医学部、農学部、水産学部といったあらゆるジャンルの学部を擁する総合大学は存在しないのである。当初は専門化されて都合が良かったのであるが、最近では矛盾が大きくなっているとのことである。最近の学術研究は所謂「学際」的なものが多くなり、またその要請が一段と高まっているのであるが、現行の大学制度では

北京大学といえども、単独で学際的な研究が行なえなくなっているという事である。これを打開するために複数の大学あるいは中国社会科学院や（自然）科学院に所属する研究所と共同研究している。

専門化されていると言えば、卒業後、すぐに役立つ人材を養成することを意図して大学を設立したことがうかがえる実例が、それこそ到る処に見られる。例えば、北京には北京廣播(Broad Cast)放送学院という単科大学がある。そこには文科系学科として、放送記者を養成する「編採」科、文学や芸術番組のディレクターを養成する「文藝編輯」科、テレビ番組やテレビ映画などのデイ

レクターを養成する「電視影片編輯」科があり、理科系学科としてラジオ・テレビの技術者を養成する「電視播控工程」科と「電視放送工程」科があり、卒業生はすべて放送局やテレビ局で働いている。また国際外交の翻訳官を養成する外交学院がある。そこではもっぱら国際的な外交に必要な基礎的な知識を学習した上で、それぞれの国の言語を五年間を費いやして勉強している。

外国語の学習を目的とした学部や学科であっても、先に挙げた外交学院における外国語履修に見られるように明確な目的をもち、実際に適合する外国語教育を行なっている。例えば北京大学の外国語系学部は大学の教員や研究者を養成する（一部には外交官になつている人もいる）、北京師範大学の外国語系学部は大学または高級中学の教員を、北京師範学院のそれは高級中学または初級中学、小学校の教員をそれぞれ養成することを目的としている。外交部（外務省）の管轄下にあると言われている北京外国語学院（一般には「一外」と称されている）は外交官をはじめ各種のジャンルで活躍できる人材を育成している。これに対して北京市の管轄下にある北京第二外国語学院（「二外」と略称されている）では主として中国国際旅行社の総社や分社で通訳として活躍する人材を育てている。北京対外貿易学院にある外国語学科は国際



貿易に役立つ外国語教育を行なっており、北京市にある国際政治学院に設置されている英語、フランス語、ロシア語、日本語、ドイツ語各専攻をもつ外国語学科では、国際政治で有用な語学教育を行なっている。これと似た国際関係学院には英語、日本語、フランス語各専攻のある外国語学科があり、これまた国際関係論の研究に役立つ語学教育を行なっている。

この他に、思わぬ単科大学や専門学校でも外国語専修の学科が設けられている。たとえば天津財經学院には国際金融の分野で役立つ語学教育をしており、中国民用航空専科学校では民間の国際航空路線で活躍するための英語学科があり、上海海運学院では遠洋運輸業務に必要な外国語教育を行なう学科がある。また長沙鉄道学院には英語、フランス語の各専攻コースがあり、鉄道関係者を育成する学校の教員を養成する西安鉄道師範学院にも外国語学科が設置されている。また日本では想像もしていなかったことだが、中国人民解放軍が設置した外国語学院が南京と他のある都市の二箇所にある。この存在を知ったのは、私たち一家が住んでいた宿舎の服務員さんの一人が南京にある学院に合格したので、別れの挨拶を私にしてくれたからであつた。さらに北京市人民警察学校にも外国語学科が設けられている。瀋陽にある中国医科

大学には日進月歩の外国の医学雑誌や文献を翻訳する人材を育てるために、医学専門日本語クラス（六年制）を設置しているとのことであつた。

最近の文科系学科で顕著な傾向としては、既に述べた外国語以外に、二種類ある。一つは経済管理に関するものであり、もう一つは観光事業に関連するものである。経済管理については、私が中国で生活していた頃よりかなり論議され出していた。特に今世紀内に四つの現代化を達成しなければならぬというスローガンが強調されるようになってからはとくにそうであつた。これまでの「親方日の丸」ならぬ、「親方五星紅旗」という風潮がかなり広まっており、とりわけ「文化大革命」期では、経済効果を重視する態度は、「経済主義」及至は「資本主義の道を歩むもの」として批判されたこともあつて、本格的に「経済管理」に取組むことが敬遠されてきた。しかし、四つの現代化に向けて出発し、外国との先進的技術を導入することが叫ばれ、それが実施されても、国内に導入されてから、それを有効に活用できなくては徒勞に終ることが、国内外の間から認識されるようになった。具体的には外国の工場、企業を視察した中国の実務官僚や経済研究者の報告や、中国の工場や企業を參觀した外国の専門家のレポートによって指摘された。その挙句に

冬期、新組織部員 を募ります!



- 資格 関大生協の学生組合員であること。
- 条件 生協運動の柱である文化運動の担い手たらんとしていること。講演会、映画会などの企画、運営をその一環として行ってみようと思っていること。
- 方法 現在三叉路付近にある生協プレハブの組織部に来て下さい。組織部員が面談します。(尚、組織部員には若干の活動費が支給されます。)

は「テーラー・システム」や「フォード方式」、果ては日本の「トヨタ」の生産方式を紹介する記事が新聞に紹介されたことがあった。とくに「トヨタ」については、日本人の某先生の書いた著作が中国語に翻訳され、出版される程であった。ほぼ、それと前後してチャップリンの「モダン・タイムス」が中国の主要な都会で上映され、大衆から拍手喝采を博していた。しかし、社会主義経済に相応しい経済管理の方式を科学的に研究し、教育する機関や学校を設置することが叫ばれた。

すでにこの連載でも紹介したように、北京大学には英語と数学の基礎がしっかりした学生を募集し、教育する

「国民経済管理」学科があり、中国人民大学には「工業経済管理」「農業経済管理」学科が設置された。天津市にある周恩来総理と深い関係のある南開大学、先ごろ関西学院大学と姉妹校の関係をもった、中国でも有数の日本研究のスタッフと蔵書を擁している吉林大学、山東半島の根っこにある山東大学、長江中流域の名門校の一つである南京大學、シルクロードの紹介で日本人にもその地名を知られるようになった蘭州大学、などの重点大学にも開設されている。なお、特別のある特定分野の経済管理を教育する学科としては、北京対外貿易学院にある「海關(税関)管理」学科、北京商学院にある「商業企業管

理」学科、北京経済学院や中国人民大学第一分校に設置された「工業企業管理」学科、北京財貿学院に設けられた「工商行政管理」学科などがある。特記すべきことは次に述べる観光事業に関する経済学の勃興と呼応して、北京第二外国語学院には「旅遊経済管理」学科が今年十月に開設されたことである。勿論、理科系の学科も、本工学部部の「管理工学科」に相当する学科が理工科系大に設置されている。それらかなり専門化され、特殊化された管理工学を教学している。それは後で述べることにしよう。

観光事業は中国語では「旅遊事業」と呼ばれており、



日本の内閣に相当する國務院の直轄下に「中国旅行遊覽事業管理局」という機構が設けられており、具体的な業務は中国国際旅行社と中国（国内）旅行社が行なっていた。ところが「四人組」追放以前は、対外的には、中国の外国人旅行はあくまでも国際的な友好関係の増進であって、外貨獲得のための観光事業ではないと主張していた。事実、我われ日本人が中国旅行しても工場、農村の人民公社、都会や田舎の学校や病院などしか參觀できず、所謂「観光旅行」とは程遠いものであった。また国内の中国人にしても、観光旅行をする経済的な余裕など無く、「旅遊事業」はもっぱら対外的な友好活動に奉仕するという形で行なわれていた。従って、外国人旅行者の数は、一年間に二、三万人というところであった。ところが、一九七九年春に、中国共産党機関紙である『人民日報』に「観光事業は煙の出ない（輸出産業）工場である」という社説が発表されるや、国を挙げて積極的に観光事業に取り組み始めた。『人民日報』よりも発行部数の多いと言われる内部発行の四頁タブロイド版の『参考消息』には、連日のように外国の観光事業を紹介する記事が掲載され、その中には台湾のそれを紹介する記事が数多く見られ、時には特集されることもあった。

このような情勢を反映して、先の外国語学科の項で紹介

介したように、北京第二外国語学院では、従来からあつた、英語、日語、独語、仏語以外に、旅遊英語、旅遊日語、旅遊独語の三学科が新設され、さらに先程述べた「旅遊經濟管理」学科も設けられた。この四学科はもともと北京旧市内に新設された「二外」の分校にあつた（本校は北京旧市内より東数キロメートルの所にある）。それが独立して「旅遊学院」となるということである。南開大学の外国語学部の中にも「旅遊」語学科が設けられた。また抗州大学にも「旅遊經濟」学科が新設された。

北京大学のように文学部、法学部、経済学部、理学部、工学部（一部分）を包括する総合大学としては、南開大学、復旦大学、吉林大学、山東大学、南京大学、厦門大学、中山大学、武漢大学、四川大学、蘭州大学の重点校以外に、黒龍江大学、抗州大学、暨南大学、華僑大学、福建省福州にある）などの一般校がある。これらの大学を含めて、文科系および外国語学系の大学は五十校前後しかないが、理科、工科、農科、林科、医科各科の大学はその約四倍ほどの二百校前後もある。

名称から見ると文科と理工科系を包括した総合大学のように考えられるが、実は工科系の総合大学であるもの



が数校存在している。まず第一は北京大学と相完関係にある清華大学、南開大学と対をなす天津大学、復旦大学と組になっている同済大学、抗州大学の工科系を補完する浙江大學などがある。それらはいずれも重点校である。ついで工科系総合大学の名称としては「〇〇工業大学」と呼ばれるもので、北京、吉林、合肥、西北（西安）がある。これに次ぐものとしては、「〇〇交通大学」と称される大学で、鉄道、船舶、車輛を中心とした工科系の学部以外に、幅広い工科系の学部を包括している。この名称の大学は、北方（北京）、上海、西安、西南、とりわけ西安は歴史も古く、一番充実した交通大学と言われて

いる。これを追う工科系総合大学としては、長沙にある中国科学技術大学、長沙にある国防科学技術大学、成都科学技術大学がある。以上に挙げた工科系大学以外はすべて単科大学であり、一般には「○○工学院」と称しており、北京、東北（瀋陽）、南京、華中（武漢）、華南（広州）、内蒙古などの各地に設置されており、そのほとんど大部分が重点校である。なかには北京工学院のように、北京工業大学よりも充実していると言われる工学院が多い。それ以外の工科系単科大学はかなり専門化されたものとなる。

北京に北京鉄鋼学院という単科大学がある。そこには採磁工学科から始まって、製鉄、冶金、金属加工などから管理工学科に到るまでの21学科が設置されている。またこれに類似したものとして、「○○石油学院」と呼ばれる単科大学が華東（山東省東営）、大慶、撫順などに置かれている。また地下資源全般の開発に取り組む大学としては「○○地質学院」があり、長春、武漢などに設けられている。また石炭の採磁からその综合利用及び企業管理工学までの8学科を設けて、石炭の総合研究に中国矿业学院（徐州に設置）がある。それは山西省の大原市にも設けられている。

その他の工科系単科大学としては、北京化学工業学院、

北京郵便電報学院、北京航空学院、華東紡績工学院（上海）、東北重型機械学院、北京農業機械学院、ハルビン船舶技術工学院、山東海洋学院、華東水利学院（南京）、武漢建築材料学院、武漢測量学院、武漢水利電力学院、成都通信工学院、重慶建築工学院、北京冶金機械工学院、北京輕工業学院、北京化学纖維工学院、北京氣象專科學校、中国民用航空專科學校、上海機械学院、上海鐵道学院、上海海航学院、長春光学精密機械学院、ハルビン電気工学院、鎮江船舶学院、杭州電子工業学院、西安冶金建築学院、西安公路（道路）学院、華北水利水力電気学院、鄭州航空工業管理專科學校、鄭州食糧学院など、その名称から察せられるように様々まである。

医科系総合大学は、中国首都、中国（瀋陽）、白求恵（ベトナム・長春）、ハルピンの名を冠する「医科大学」があり、単科大学の「医学院」は各地にあるが、「中医学院」は数校しかない。農科総合大学は北京、長春にあり、農科単科大学としての「農学院」「林学院」「水産学院」がそれぞれ十校及至数校、全国に設置されている。薬科大学は「南京薬学院」などの二、三校がある。以上が中国に存在する大学、高等専門学校の概況である。

お知らせ

編集委員募集

書評運動は、生協運動の一環である教育・文化活動を担って発展してきました。しかし、現在の文化が、画一化・既成化される中で、独自の文化活動を完遂させなければならぬのにかかわらず、編集委員不足という物質的な条件と、それにも増しての編集委員の力量不足が相乗的に重なってしまい、満足のいける活動はできていません。

そこで書評編集委員を募集したいと思えます。現在の閉ざされた暗黒の文化情況に少しでも独自の文化の火を点したいと思っている方、あるいは新たな文化運動、思想運動の必要を感じている方、編集の仕事を手伝いたい

とされている方、是非書評編集委員会において下さい。私たちは諸君に自由で、創造的な活動の場を提供したいと思えます。

なお、書評編集委員会の活動は、書評誌の定期刊行化はもちろんのことですが、講演会、映画会の開催等の、広範な文化・思想活動を形成しようと考えています。

書評編集委員会は、読者の積極的参加を期待します。

投稿規程

最近読んだ本の書評・内容紹介・批判等の作業を通じて自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表論文、エッセイ等どのようなものでも結構ですし、書評誌の中の個々の作品に対する反論・批判等でもかまいません。

せん。詳細については三叉路附近・事務プレハブ組織部
内書評編集委員会まで直接にお問い合わせ下さい。

◆原稿は原則として縦書きで、1行25字、22行を1枚
とします。

◆原稿には住所、氏名、学部、電話番号等連絡先を詳
しく明記して下さい。

◆原稿は一切返却しません。必要な場合はコピーをと
っておいて下さい。原稿の採否に関する問い合わせ
には一切応じません。採用分にはこちらから連絡し
ます。

◆連絡先

〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合「書評」編集委員会

電話 06-388-1121 内線4821

〈合評会に関するお知らせ〉

書評編集委員会では、ともすれば一方的になりがちな
書評を、読者の意見・感想をとりあげた「読者の参加す
る書評」を目ざし、合評会を開催します。今後の読者の
積極的参加を望みます。

編集後記

めでたさも 中位なり おらが春（二茶）的気分で
迎えた一九八二年。

昨年一年間を振り返ってみるに——サダト・エジプト
大統領暗殺が示す中東の深い亀裂、イラン革命後のホメ
イニ師と反ホメイニ間の血の抗争、核兵器反対デモが訴
える欧州の不安、そして、ソ連を含めたところの東欧諸
国のみならず、世界の命運にもかかわるのであろう最近の
ポーランド情勢、等々——そんな中で、日本の「天下太
平（？）」がいやに不気味に思えてくる。日本は、本当に
「太平」なのか？ 物質的豊かさに満足してしまつて、世
の中の本当の姿を見ようとしない人間のなんと多いことか。
感性をとぎすまし、問題意識を持つように心がけねば
ならない。軍靴で、日本が再び踏み荒されることがない
ように。

『書評』五九号は、特集が組めないままの発行となつて
しまいました。これは、編集委員の勉強不足、委員会の
組織運営の甘さによるものだ、と自省しています。

次号六〇号は「新入生歓迎特集」です。

訂 正

本号三十一ページ五行目の小見出しをぬり
ついでしています。これは、編集部が執筆者で
ある岡大工部障害者解放研究会の承諾なしに
小見出しをつけたためにほじたものです。そ
の表現が内容上不適当である旨執筆者より指
摘され、配布した本誌を回収し、編集部が訂
正を行ないました。なお他の小見出しについ
ては、執筆者の事後承諾を得、そのまま掲載
しました。

改めて執筆者にお詫びを申し上げます。

1982年1月号 通巻59号

編集・発行 関西大学生協同組合・組織部「書評」編集委員会
連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎388-1121 内線4821)
頒 価 250円